



# ふれあい長寿苑



## みずのとう 癸卯 脱兎不如蝸牛歩

施設長 松井 一裕

夏目漱石の小説「草枕」は、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」という冒頭の一文から始まる。

古来、兎は我々日本人の身近な存在であった。大国主命にまつわる神話伝説「因幡の白兎」しかり、1914年尋常小学校6年生用文部省唱歌に採用された童謡「ふるさと：高野辰之作詞・岡野貞一作曲」の調べは、今も各地に残る山あいの風景を前にすると心の奥から自然に湧き出るように口ずさみたくなる。例年我が家では、中秋の満月（去年は9月10日）には縁側にお饅頭とススキや毬栗をお供えし、月を愛でる。孫たちも加わって、まんまるお月に「うさぎのもちつき」探し。しかし、今年はすっかり忘れていた。

当苑の責務の第一は、入所者の健やかな日常を支え、精神的・肉体的機能の低下予防と改善であり、最終目標は元気になっての自宅退所である。高齢者100人が入所していれば、1年ほどで医学教科書に記載されている殆どすべての疾病に身近でかかわることとなる。苑内ではひとり一人の身体的危険因子は毎日のように変化し、「一難去って、また一難」。危険察知と適切な対応は、職員全員の弛まぬ努力で涵養された専門的知識があって始めて可能となる。今年4月当苑施設長となつての間もない頃、複数の職員から「先生、ここは介護する處ですよ」との助言を賜った。言外に込められた意味詮索を避けるが、「なるほど、そうできれば楽に相違ない」を思った。半面、自分なりに凡その確診なくしての他病院紹介に抵抗があった。当苑のような施設は、上位専門病院と特別養護老人施設との間で微妙な位置付けとなっている。入所者利益の観点、また、社会経済性や近未来の当苑持続性の観点からは、苑内での治療可能な疾患幅を広げることが肝要であると考えている。盛夏に経験した苑内 Corona 感染時には、救急救命を要する病態を除き、種々の疾患を苑内完結することを余儀なくされた。

気付いてみると、脱兎の如く3旬が過ぎ去った。最近は、度々、遠い昔、ひよこ医師として勤務した飛騨高山日赤病院（出身大学の北限関連病院）での5年間の日々が蘇る。迷いながらもがむしゃらで真剣に患者に向き合っていた日々。その頃の自分と現在の自分を比較している自分がある。

「草枕」の一節を心に刻み、聞こえない聴診器と錆びついた五感を動員し、時々閃く第6感を頼りとし、蝸牛の歩みに似た日々が続く――のいつまで？

## 12月8、9日（木、金） 通所リハビリ ティーパーティー

2カ月ぶりの手作りおやつを行いました。ホットケーキを焼き、クリームとフルーツの盛り付けをして頂きました。作業を進んで行ってもらえるよう職員がサポートし美味しそうなホットケーキが出来上がりました。

## 12月24日（土）

### 入所 クリスマス会

クリスマスイブと重なったこの日に、入所者の皆さんとクリスマスメッセージカードを作成しました。カードには、個々に

メッセージを書いてもらったり飾り付けて頂いたりしました。その後、美味しいケーキを味わって頂きました。



## 給食委託業者さんよりお知らせ

『みんなの日曜日』と題して、入所者の皆様に外食気分を味わって頂こうと、

1月22日（日） 昼 牛 井 夜 天津飯

2月 5日（日） 昼 親子丼 夜 うな井



吉野家さんの器でご提供致します。ほんの少し外食気分を味わって頂けたら幸いです。

## 家族アンケート 回収1月末まで

日頃から気になることや感じておられることなど、先月配布致しましたアンケート用紙にお書き下さい。次年度のサービス向上に繋がりたいと思っております。



## 1月誕生者

2月行事予定 4日（土） 節分会

（令和5年1月7日発行）